國學院大學学術情報リポジトリ

九谷庄三と明治期の九谷焼

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-05-22 キーワード (Ja): 九谷庄三, 九谷焼, 明治工芸, 陶磁器研究, 輸出陶磁 キーワード (En): 作成者: 今野, 美怜 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001666

論　　文　　要　　旨

学籍番号	233324	氏　名	今野　美怜

論 文 題 目：

九谷庄三と明治期の九谷焼

（内容の要旨）

加賀（現在の石川県）の伝統工芸である九谷焼は、明治期に輸出陶磁としての地位を確立した。明治 20 年には、生産量の多い瀬戸や美濃を抜いて陶磁器としての輸出額が日本一位となり、また九谷焼の生産量の約 80%が輸出に充てられていたという。しかし、九谷焼輸出の隆盛は、大正 12（1923）年の関東大震災によって、主な貿易港だった横浜と、そこに店を構えていた商店が壊滅したことで終焉を迎えた。

明治期の九谷焼の特徴として、西洋好みの豪華絢爛な金襴手が挙げられる。江戸後期に赤絵細描が台頭するまでは、九谷焼は鮮やかな五彩や青手の作品が主流であり、現在でも九谷焼の主流は金襴手や赤絵とはいえない。明治期の九谷焼の輸出陶磁としての需要と、それに応えるように大量に生産された金襴手の時代は、九谷焼の歴史の中で特異な期間だったといえよう。

本稿で中心として論じる九谷庄三については先行研究自体ほぼ存在しない状況である。優れた功績があったにも関わらず、現状の研究ではその評価について検討すら十分になされていない。そこで、本稿では、庄三の陶歴と作品から、その画題や制作の背景について論じ、また粉本の存在を指摘する。そして、作品に関する影響関係や、庄三が九谷焼に与えた影響について改めて検討する。

九谷庄三は、彩色金襴手という新たな技法によって、江戸から明治という時代の転換期にあった九谷焼に繊細な絵画表現をもたらした人物である。また、自身の工房では分業制を取り入れるなど生産の効率を向上させ、指導者としても優れた成果を残した。明治 18 年には、設立されて間もない農商務省から死後表彰を受けたことからも、輸出陶磁として九谷焼が花開いた背景には、庄三による技術革新があったことは明白である。

一方で、明治期の九谷焼は、国内外から粗製濫造の批判を受けていた。庄三の作品も例外ではなく、イギリスのオーズリーとボウズによる *keramic art of Japan* には、庄三作品への批判が記されている。庄三の真作ではなく、いわゆる「庄三風」と呼ばれる、他の職人による庄三の手に似せた作品が氾濫し、輸出されたためである。裏を返せば、庄三作とは名ばかりの粗悪品が出回ったことは、庄三の人気の証左となる。

最後に、庄三の功績と現代の九谷焼に息づくその影響について考察し、本論文の結びとする。

キーワード（5 語）

九谷庄三、九谷焼、明治工芸、陶磁器研究、輸出陶磁